DVD『目白の雪の日』を観て

私は大学院に進学するまで、日本女子大学とはまったく縁がありませんでした。以前属していた中、高、大学には、桜楓会ほど精力的に活動する同窓団体がなかったため、正直、少し不思議に思っていたところがありました。なぜ、日本女子大学には、これほどまで、卒業してからもずっと母校を大切にしている人が多いのだろう…と。もちろん、私も母校には愛着があります。しかし、卒業後何十年も、母校を支えるモチベーションになるほどではありません。なので、純粋に、気持ちがわからなかったのです。

このDVDを観て、ようやく一端がわかったような気がします。特に、最後に成瀬先生が仰った、「ここの学生が私の娘たちです」という言葉に表れているように感じました。日本女子大学は、当時の学生たちにとって、まるで家族のような居場所だったのだろう、実際の妻も子も持たず、女子教育に生涯を捧げた成瀬先生は、本当に父のような存在だったのだろうと思いました。だからこそ、卒業して別々のところで巣立っていっても、変わらず日本女子大学の卒業生であるという誇りを持って生きていく人が多いのだろう、と理解しました。

私が本校に所属したのは、たった2年間、それもコロナ禍でした。校舎に出向く機会はほとんどなく、人との繋がりも希薄で、「夢見た大学院生活、こんなはずではなかった」と思ったことも一度や二度ではありません。しかし、この学びの場がさまざまな人の思いによって紡がれてきたものだと知って、改めて感謝しようという気持ちになりました。

人間社会研究科心理学専攻博士課程前期　N・R
（ご希望によりイニシャル表記にて掲載）

目白の雪の日　感想ファイル

私は附属中学から成瀬先生の功績や、どのようにして日本女子大学が設立されたのか授業を通して学んできたため、自分では本学の歴史についてよく知っていると思っていた。しかし作品を通して、本学の設立に際して成瀬先生がどのようなお考えをお持ちだったのか、当時の学生達の様子など、これまで知らなかった側面も知ることができ、興味深かった。

私はこれまで、成瀬先生はキリスト教を信仰していたのに、なぜ日本女子大学はキリスト教の学校にならなかったのか、不思議に感じていた。しかし、本作品の成瀬先生のお言葉を聞いていて、成瀬先生はあえて宗教と分けることで、女性を人間として育てようとしたのかもしれないと考えた。当時、女子教育の大切さが理解されていなかったため、キリスト教の要素を入れずに、女子を男子と同じように教育することが男子との平等につながると考えたのだろうか、と思いを巡らせた。

劇仕立てのこの作品には、成瀬先生の話を直接聞いているような臨場感があり、特に告別講演の内容は、文字や人伝えに教わるより、はるかに心に響いた。成瀬先生が学生達に思いや理念を託したことがよく伝わり、その後学生たちが成瀬先生を慕い、教えを大切にしていった理由が分かった気がした。三綱領についても、改めて成瀬先生が、後世に残していこうとお書きになったのだと分かった。この先も大切にしたい考え方であり、活動の軸になる教えだと感じた。

今後も、本学の歴史や、成瀬先生の信念について知見を深めていきたいと思う。

家政学部食物学科
長野 絢子

「目白の雪の日」を視聴して

「目白の雪の日」を視聴し、日本女子大学の設立に向けて尽力した成瀬仁蔵先生及び関係したすべての方達の熱意が最も印象に残りました。現在私が当たり前に享受している女子に向けての高等教育の場は、設立当時の多くの人々の努力があってこそのものだということを改めて学び、先見の明に感服するとともにこのような場を与えてくださったことに感謝の気持ちでいっぱいです。

私は日本女子大学に入学してから学ぶことの楽しさを日々体感しています。授業を受けるたびに疑問が芽生え、先生方に質問することでまた新たな学びを得ています。学生の本分である学業に集中できる環境で日々楽しみながら視野を広げられていることがとても楽しく、そうした毎日の学びによって将来的な選択肢の幅も広がってきました。実家にいる母に近況を報告するたびに「楽しそうで何より」と言われていますし、私自身大学生活がこれほどまでに実りのあるものになるとは想像していませんでした。

このDVDを視聴することでそうした充実の学生生活が、成瀬先生や女子教育の重要性を考え行動を起こしてきた人々、実際に一生懸命学びを享受してきたこれまでの学生たちのおかげで得られているのだと改めて気づくことが出来ました。私の学生生活の場は先人たちの努力で成り立っていることを思いながら、未来の学生に向けてこの環境を守っていきたいと感じました。これからも頑張っていこうと思わせてくれるDVDでした。

文学部日本文学科　S・S
（ご希望によりイニシャル表記にて掲載）

「目白の雪の日」視聴感想

DVD を視聴して、成瀬仁蔵先生は、生徒と近い距離にいた人だということが分かった。そのため、成瀬先生が亡くなる直前にも卒業生、学生が集まった。大学創設の初めの頃、学生は、寮に入っていた。寮は本当の家庭のように縫い物や食事、家計、学年が下の子の面倒まで寮生で行っていた。頭山との女子教育での対談では、欧米のように女子に男子と同じように知識をつけさせるだけでは駄目だと強く語っていた。女子は男子と考え方など価値観が違うため、男子と同じ教育を望んでいないと考えていた。成瀬先生は、今までの世間からの女子の扱いを変えようとしていたのだと思った。そのためにまず今までと違った女子学生を育て、社会の考えを変えようとしたのだと思った。

頭山との対談では、女子は道具ではないという言葉が印象に残った。明治頃、工場で働く女子にも学問を教える工場もあったと話を聞いたことがある。この学問は成瀬先生の考える人格を育てることとは違ったものであると思った。DVD を視聴して大学創設時、学生は家庭的なことを学ぶと同時に人としてどのように生きるかを学んでいると思った。この教育は今の教育につながっているとも思った。小中学校では男女関係なく道徳の授業が行われている。人格を育てる成瀬先生の考えと一致したものであると思った。

成瀬先生は自分の意思は、卒業生、学生に託したと言っていた。現代の女性の多くが男性と同じ立場で、教育を受け、働いている。知識を学ぶ学問の中でも、成瀬先生が残した 3 つの方針は忘れずに学びを続けたいと思った。そして、桜楓会はその思いを後世に残していくものであると思った。

理学部物質生物科学科
大谷津 文

人としての誇りを忘れずに

はじめに、私はコロナ禍に受験で日本女子大学に入学し、2 年間の大半を自宅のオンライン受講で過ごしています。そのため学友や先生と対面することはほとんどありません。これまで私の中で成瀬先生は、日本女子大学の創立者であるという認識でした。しかし『目白の雪の日』を視聴し、成瀬先生と大学の歴史に深く感動しました。成瀬先生の女子教育への情熱や教育方針、桜楓会とのつながりも理解できました。第 1 回生の大村嘉代子氏が成瀬先生のドキュメンタリーをドラマ化し映像に残して下さったことに、心より感謝いたします。

第一景では、成瀬先生が渋沢男爵邸での会合へ自転車で泥まみれで参じ、女子教育の実現のために熱弁されているシーンに衝撃を受けました。会合で他の出席者たちは女子にも「アメリカのように男性にも負けない教育を展開するべき」と主張します。しかし、成瀬先生は反論し、女子を人間として、婦人として、国民として誇りを持って生きるよう育てたい志を伝えます。そして「自己を信じ、自己の無限に延びる可能性を信じさせたい」「人間としての自覚を与え、努力によって啓発 される強い信念を持たせたい」という思いを述べています。成瀬先生はアメリカを視察した経験も踏まえた上で、日本での女子教育は生きた人間としての尊厳を持つためのものという一貫した信念であったとわかりました。

第二景の寮舎では成瀬先生が校長として寮生と近い距離で接し、学生の悩みに応え励まし、時には怪我の治療までされている場面もありました。寮生が住まいの掃除や料理をし、当番制で「お主婦さま」を置いている集団生活では、学生は勉学の前に人としてきちんと生きなければならないという教えがゆったりと実践されていました。また、成瀬先生も学校の敷地にお住まいで、実際に学生の父のような存在でいらしたことが伺えます。そして「食は健康の基」というお言葉は温かく、心に沁みました。

第三景では一転して女子大学講堂での成瀬先生の告別講演が映り、最後の言葉をお話されていました。大病にも関わらず、奮闘して生き抜く自らを通し、努力とはこのようなものだと渾身の教育を貫くお姿に胸を打たれました。そして、ご自身の後継者は桜楓会に求めると述べられていたことも知りました。桜楓樹の絵も印象的でした。

第四景の成瀬先生の家では雪の日にお見舞いで来訪した渋沢氏に、自らの「跡継ぎは学生である」とはっきり告げられ、胸が熱くなりました。教訓の「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」は、病床の成瀬先生が学生に残した大切なメッセージであることも心に刻みました。

エンディングでは「私たちは、創立者の大いなる夢を理解し、尊厳を持って暮らしているでしょうか」と問われ、私は在宅しがちな学生生活の中で「誇り」を放念していたことに気づきました。映像で流れる桜楓会合唱団の成瀬先生愛唱歌"O Lord! Correct Me"が耳に残り、調べたところ、大学のホームページで日本女子大学合唱団の歌唱が聴けることがわかりました。これからも人としての「誇り」を忘れそうになったらこの曲を聴き、成瀬先生の教えを思い出そうと思います。

人間社会学部文化学科
藤田 理紗